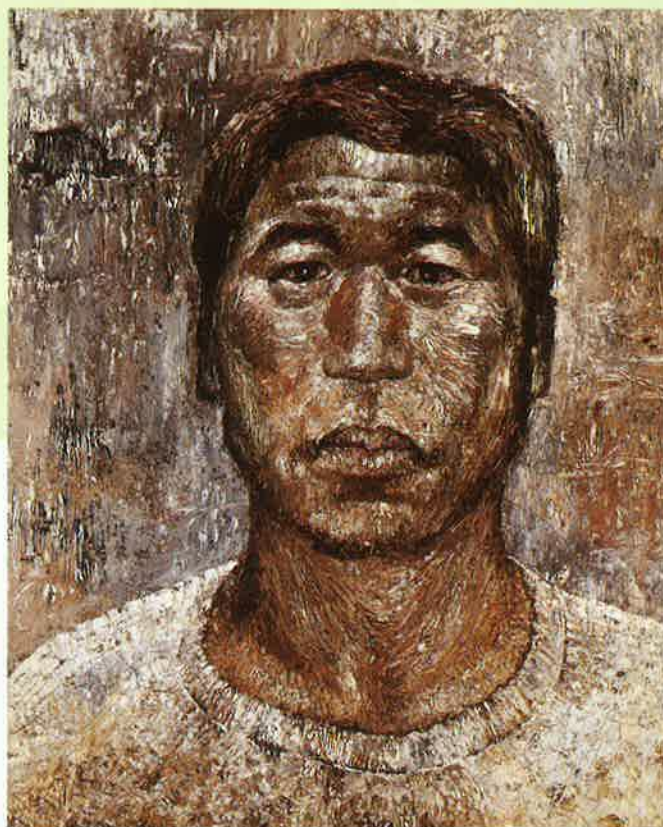


KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより



「自画像」1964年頃

CONTENTS

- | | |
|--|--|
| 2 寄稿文 吉田 宏太郎 | 9 新収蔵作品紹介
常設展 |
| 3 寄稿文 伊藤 明美 | 10 第18回 蕪壱祭
第20回 馬耕忌
第10回 日勝祭 |
| 4 平成24年度特別企画展
「神田日勝と新具象の画家たち」 | 11 感想ノートより
他館での当館所蔵作品の展覧会紹介
福原記念美術館と共通入館券発行
神田日勝関連書籍紹介 |
| 5 特別企画展に寄せて
「新具象の時代」 米山 将治 (神田日勝記念美術館初代館長) | 12 子どもワークショップ (夏・冬・春)
アート・キッズ・クラブ
子ども芸術鑑賞ツアー
親子ワークショップ
美術館の学校活用 |
| 6 展覧会事業実行委員会主催の展覧会 | |
| 7 神田日勝記念美術館友の会創立20周年記念事業
芸術鑑賞バスツアー | |
| 8 第18回 馬の絵作品展 | |



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館

〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL.0156-66-1555

<http://kandanissho.com/>

2013.3.31

30

神田日勝 永遠の生命

吉田 宏太郎

代表作「室内風景」を七十年代後半、私は画学生の際に見ている。新聞紙が貼られた壁の前に膝を抱える人物は私のように

だった。大学入学以後十年ほどは、私は溶いた油絵具を使ってエアブラシで制作していたことから、借家の壁や天井を汚さないように部屋全部に新聞紙を貼っていた。優れた芸術作品が持つ普遍性と、画面と私の状況から神田日勝という作家に

尊敬の念を抱き、自己投影してしまうほどの親しみを感じていた。

九州生まれの私には北国に生きる事の厳しさとその厳しさ故の芸術に畏怖する。しかし、ロマンチズムも感じていた。神田日勝の作品は、画面はリアリズムだが詩情や精神を本質的には描いているように思うのだ。「室内風景」を初めに見たときから感じたことだが、究極に自己を見つめ



室内風景 独立展 1970年出展

た作品でありながら、壁面と床を同一面に近づけたり、点・線の要素と色面の対比など新しい造形的な試みをなされていることも記憶に残った。土色の作品から抽象表現を内包したバイオレットブルーの「家」へ、さらに現代的に感じる明るい色彩の静物画。比較は不適当だが、私が四十年で変化したことを十年に満たな



人と牛 C 独立展 1968年出展



馬 独立展 1965年出展

ける人たち。なぜだろうか。自らの魂。人間の根源を見ようとする目、媚びない人、魂の導くままに生きた人に対する取り巻く現実からのスタンスは決まっているのか。その魂を知らぬ者は拒絶し、通り

い年月で進展させたことに驚かざるを得ない。神田日勝を思うとき、宮沢賢治や有島武郎など北国の文学が思い出される。しかし、文学性や日勝の人生のドラマ以上に独立の作家としての造形性の確かさも忘れてはならない。

もう少し好きな作家、関連する人物を挙げる。ゴッホ、モジリアニ、ジェリコー、古田織部。生前の評価の低さ、権力からの制裁を受

過ぎる・・・ここまで書いて、否、ルサンチマンの入った私の共感こそを日勝が拒絶するだろうと思いはじめた。生きる重さがあったも、惨めさや屈折がないことこそが美しい。これこそ、私が今、受け止めるべき神田日勝の核なのだろう。

神田日勝先生のご親族様、菅先生、及び関係者の皆様にこの機会を与えていただいたことに深く感謝いたします。

(独立美術協会員)



画室A 独立展 1966年出展

寄稿文

神田日勝記念美術館の キッズ・ボランティアの活動を振り返って

伊藤 明美



アート・キッズ・クラブ通信

今月もまた美術館から楽しいお便りが届きました。土曜の工作教室「アート・キッズ・クラブ通信」です。随所に可愛いキャラクターが登場し、製作する作品の写真と作り方、子どもたちの大好きなクイズ、思わず「へえ〜」と声が出る「うちく大百科」まで紹介されています。わくわくしながら封を開ける子どもたちの姿が目に見えます。この教室では、遊んだり飾ったりするものを短時間で完成させて家



アート・キッズ・クラブ

に持ち帰ることが出来ます。学校や学年を超えてお友だちもたくさん出来ます。釜澤学芸員のわか

私は、昨年から美術館の子ども向け事業のお手伝いをしています。ボランティアというより可愛い子どもたちの中に紛れ込み、一緒に遊び、学び、充実した時を過ごしています。

子どもも芸術鑑賞ツアーでは、十勝千年の森で開催された「北海道ガデー

りやすいギャラリートークで日勝さんの絵や様々な美術作品を身近に感じることが出来ます。こんな楽しいことを子どもたちが黙っているはずがありません。次回には新しい仲間を引き連れてやって来るのです。クラブの先輩としてちょっぴり自慢げな様子は可愛いものです。彼らの広報活動のおかげで、アート・キッズ・クラブやほかの催しの参加者も回を重ねるとに増え続け、準備するスタッフは嬉しい悲鳴のようです。



ガーデンショー見学

「ある日のワークショップでの会話です。陶芸の先生も驚く程の速さでみんな三枚の皿を作り上げました。子どもたちが物を作る時の決断力にいつも感心します。私なら少しでも見栄えの良い物を作りたいという気持ちで迷っているうちに時間が過ぎてしまいますが、子どもは直感力で作っているのです。うか。それがまた、



木や木の木の工作

遠い昔、ヨーロッパの美術館を訪れた時、小さな子どもたちが絵の前に座り、目を輝かせてギャラリートークに耳を傾けていたので印象的でした。私もこんな環境の中にいたら、もう少し芸術的な感性が磨かれていたはずと感じたものです。時を越え、今そんな機会を与えられたことに感謝しています。(神田日勝記念美術館 運営協議会委員)



冬休み子どもワークショップの陶芸

平成24年度 特別企画展

神田日勝と新具象の画家たち

2012年10月23日(火)～12月9日(日)

入館者数 805名



出品作家 (五十音順)

神田 日勝	葛西 新一	神田 一明	北岡 文雄	木下 勘二
小林 政雄	霜村 英靖	神田 豊彦	浜田 知明	伏木田光夫
與志崎 朗	米山 将治	渡邊 禎祥		



神田日勝「飯場の風景」1963年



與志崎 朗「花嫁の轎」1962年



神田日勝「馬」1965年

「新具象の時代」

米山 将治

第二次大戦後は、芸術の方法もかたちも激しく変容していきます。戦後芸術に強く刺激を与えたのは、サルトルとカミュの実存主義の思想でした。社会的現実と人間存在のはざまにある「不条理」を表現行為の根柢におくとき、芸術のスタイルもおのずから異質なものになっていきます。

実存主義美術、といった呼称はみかけないが、フランス「新具象」、日本「新具象」から「壁派」、「アンフォルメル」(非定形絵画)までの戦後美術の流れには、現実世界と自己の体験との関係がとりわけ深々と反映しているようです。アンフォルメルの爆発的なパワフルな表現は、不条理の哲学から行動の思想への大転換と言ってよい

でしょう。

ひとまず广角レンズで全景を捉えてみたものの、付註が必要。『実存主義美術』という呼称は、後年に矢内原伊作が、シャコメツティ論の際に用いました。

戦後美術は、実存主義とシュール・リアリズムのふたつを支点として、手ざぐりで重ね進展していったようです。ところが、画家たちのアトリエでは、終戦から一〇年を経てもまだ画材は欠乏していました。次のような回想があります。

『油絵具を自作しようと顔料を亜麻仁油で練り上げたり、キャンパスは背広の芯地、二カワと亜鉛華を塗ったりした。(中略)世界的美術発信の中心地は、フランス

からアメリカ、ニューヨークに移り、ありとあらゆる表現方法が試みられる。日本美術会に、新制作協会をはじめとした、新具象派が現れ、新抽象派から無定形のアンフォルメル派まで続々と現れるのである。』(※菅原弘「新現美術協会五〇年史」二〇〇〇年)

『日本の戦後美術は、「新具象」から始まる。(※米山将治)』

言い切って、少しためらうのは、当時から六〇年余も過ぎた現在、「新具象」や「新具象派」の呼称がどの程度に、術語として定位置されているかという点に、気になったからです。以下は用例検証のために引用しました。

●宗左近「私説 戦後美術史」(所収、P八十二)

『二十六年に(フランスの新具象派)オム・テモワンの新風を集めた「サロン・ド・メ」展。マチス展。ピカソ展。二十七年に、ブラック展。日本国際美術展。』

※オム・テモワン(目撃者or現代の証人と和訳)

●石井公彦(編)『主体美術の歴史と系譜』(主体美術の三〇年)所収

『読売新聞社の「現代世界美術展」一九五八年(昭和三三年)、毎日新聞社「フランス美術展サロン・ド・メ」一九五一年二月(昭和二六年)、が日本橋高島屋で開かれ、戦後の若い美術家に大きな衝撃を与えた。(中略)戦後フランスの前衛絵画の動向が展示された。一九四八年からのオム・テモワン(現代の証人)ロルジュ、ミノ、ピュッフェ、モッテ、ロペイロールらは、日本では「新具象」という紹介がかなりの影

響を与えることになる。』

●吉田蒙介「北海道の美術史」(所収、P一〇〇)

『この展覧会が注目された理由は、何といっても戦争で閉鎖されていた海外の同時代の美術が、いきいきと紹介されたことだろ。サロン・ド・メは、対独文化運動のひとつとして結成されたもので、フランス画壇の新進と中堅を中心に大家や外国人作家を含めた紹介展だが、その一九四九年展という最新の制作活動 作品傾向が、一部ではあるが確認できるということに、こぞって歓迎する理由があった。』

造形性の強い具象と、新しい抽象表現を併せたこの展の傾向を、新表現主義(ネオ・エキスプレッション)と称したい。と、カタログの中で、ベルナル・ドリヴァル(当時、フランス国立美術館副館長)は述べているという。

●針生一郎「戦後美術盛衰史」(所収、P八八)

『祖国への郷愁と動乱への通告を素朴に書きとめていた朝鮮人作家・曹良奎(チヨリヨング)が、強靱な材質感をもつ「倉庫」の連作を発表しはじめるのは、五六年(昭和三十一年)ごろである。そこには「密室」の絵画も「事ではなく物を描く」課題も、さらにはルポルタージュ絵画の実験も、もっと深いところであつたとめられている。』

「人足と倉庫」(一九五七)の半開きの鉄の扉の前には、土くれのような人足が転がっている。

『(中略)「わたしは、安部真知、池田龍雄、小山田チカ工、曹良奎、中野淳、福田恒太らによびかけて「新具象」グループを作った。』

●中村聖司「日本のリアリズム展図録(北海道立近代美術館発行)所収(P八六、解説)

『このようない九五〇年代の画家たちの多くは、戦前のリアリズム表現が現実批判を見失ったことの反省に立って社会的現実を鋭く見すえて描きだそ



展示光景



資料展示光景

うとした。そのために彼らは新しい「リアリズム」を求め続けたのである。(中略)『——として一九五〇年代なかばごろから、こうした傾向を積極的に押し進め、そうした展開させようとした批評家や画家の間で、新しい絵画動向を示す呼称として『新具象』ということばが使われるようになった。』

以上は新具象をめぐる考察に必須の資料かと思えます。それら他に「日本美術論争史」(中村義一著)、「池田龍雄・中村宏」展図録(練馬区立美術館発行)、「芸術とは無難なもの」評伝・鶴岡政男(三田英彬著)、「北岡文雄」(佐藤友哉著)「ミュージアム新書・北海道新聞社発行」を併せて今回企画のための貴重な教示をいただきました。

北海道における新具象の画家たちを通過すること、神田日勝の画業への新たな視界を開きたい。その今回企画の途上で知り得たのは、日本「新具象」の流域に聳立するみごとな画家群像でした。

戦中期(一九四三年)に結成された「新人画会」松本竣介・豊光・井上長三郎・鶴岡政男・大野五郎ら八名の細流が、戦後は自由美術家協会と合流し、前衛美術会や日本美術会と交錯し、ふたつに「日本アンデパンダン」と水脈を通じつつ、一九五〇年代の美術運動の主流となるさまが、如実に看取されました。

作品で見ると、まず最初に挙げられるのは浜田知明の「初年兵哀歌」シリーズ(銅版画)でしょうか。浜田は自分の兵隊体験を、重い存在感と切りつめた造形性で刻印しました。また、北岡文雄は中国大陸から妻子連れの引揚げ難民となり、朝鮮国境沿いの丹東に滞留のとき、東京美術学校で同期生の田風(当時、八路军の幹部になつてた)と再会。彼から中国木刻の技法と題材を知らされ感銘しました。帰国の際、一九四七年「祖国への旅」連作(木版画)の力強い刀跡と記録性は、新具象の時代へのさきがけでしょう。

「新人画会」の松本竣介(一九四八年没)、と豊光(豊川光郎)は共に早逝しています。鶴岡政男は東京大空襲で全作品を失いながらも生き延び、生活難のなかで、戦後期絵画の代表作と目される「重い手」(一九四九年)を描きました。現実の重圧に悶えさせられ苦悩する存在を、シュールに形象化しています。

一九五〇年代、ルポルタージュ絵画運動から出発した池田龍雄は、鋭い社会批判を行動で裏打ちして、一九五三年には「アメリカ兵・子供・バラック」や「網元」などをペン画で描き、

シュールリアリズムを推力として、その後もめざましい変容を遂げていきます。

第一回(ニッポン)展(一九五三年)では、山村・基地・工場への文化工作隊で得た経験をもとに、紙芝居ふうの「モンタージュのほかに、桂川寛・尾藤豊・小山田チカエなど注目される作業が輩出しています。

第三回(ニッポン)展では、基地闘争に取材した中村宏「砂川五番」(一九五五年)が掲げられます。中村も池田と同じくルポルタージュ絵画運動のひとり。やがて幻想的モンタージュを駆使して、社会派の視点を深めていきます。

また、第一回展には、一九歳の河原温の「浴室」シリーズが初出されますが、その後一九五四年の読売アンデパンダン展に、二〇点ほどの連作が発表されます。それらペン画で展開するイメージ群を、中原佑介は「密室の絵画」と評しました。これら「新具象」の時代を広義に捉えてみましたが、まだ言及を要する画家は多い。

主要なものでは、中谷泰「農民の顔」(一九五四年)。あるいは田中阿喜良(行動美術展)の諸作。浜田から書へと続く人物頭部の描き方の(丸刈り頭のよう)な)印象は、田中にも共通して、俗にいう「新具象派」スタイルの灰褐色の画面が、日本中に拡がりました。

一方、シベリア抑留の体験を、独自の空間意識と木炭を練った黒で描き、むしろ「壁派」の力リスマと更には香月泰男も影響が大きい。更には、戦後の焼け跡の破れたテントの下に、凜とし

た夜の女を描いてみせた、工口スの前衛。古沢岩美も忘れ難い。

そして、この季節のもうひとつの記念的名作は、海老原喜之助「船を造る人」(一九五四年)です。復興のロマンを造形するものとして熱い共感を呼んだこの作品は、「サロン・ド・メ」の系譜に加えて異和感がないほど。フォービズムの色彩を色面的に構成して新しい。それも一九三〇年代のバリで海老原は藤田嗣治に師事、やがて、カンピリーやジャコメッティらと共に「エコール・ド・パリ」の次世代をになう一〇人に数えられる評価を得ていたと知れば、ふしぎではありません。

東京発の美術史が述べる「新具象」は、田中阿喜良のバリ移住と曹良奎の北朝鮮帰国で閉幕となるのですが、地方からの視界では、それは違います。その後一〇年こそ「日本」新具象が熟成と転位を重ねていく、神田日勝の制作期なのです。一九七〇年に海老原喜之助が再び訪れたバリで客死し、神田日勝が「室内風景」と「馬(未完成)」を遺して他界する。その時点が本統の「新具象」の時代の終焉なのでしょう。

今回展に出展いただいた、北海道の画家たちは、この時代に「新具象」を通過点として、それぞれに有為な形成を遂げた人々です。改めて「新具象の時代」の大系とその形成を、詳さに見分けていただけると幸いです。

(元) 神田日勝記念美術館館長

※ 展覧会カタログより転載

「展覧会事業実行委員会主催の展覧会」

「新世紀の顔・貌」
KAO「最終章」

神田日勝記念美術館

二階展示室

四月二十四日～五月六日

「入場者数」七〇三名

美術評論家・中野中が企画する画家の自画像三十人展の最終章。北海道の作家では伊藤光悦の「二〇一一年―私」を展示。個性的な自画像が並びました。



「童謡の世界―渡会純价版画展」

神田日勝記念美術館

二階展示室

六月五日～六月二十四日

「入場者数」七八四名

版画家・渡会純价（札幌市在住）が二十点の童謡を主題とした、三版を重ね刷りした銅版画展。歌詞からイメージした子どもや動物や花などが素朴で明るいタッチで表現されています。なお、六月五日に記念行事として、林久美子（鹿追町在住）によるピアノコンサートが開催され、ムソルグスキの「展覧会の絵」やシューマンの「子供の情景」、童謡にちなんだ曲が披露されました。



「東北芸術工科大学の美術家たち」

鹿追町民ホール

四月二十四日～五月六日

「入場者数」九一五名

東北芸術工科大学（山形県）の山田修市、木原正徳、石井博康、鴻崎正武、青山ひろゆきの五名の教授・講師による計二十五点の大作を展示。初日の四月二十五日には山田・木原両氏による作品解説も行われました。



「新出紀久雄と水彩画の仲間たち」展

神田日勝記念美術館

二階展示室

九月四日～九月二十三日

「入場者数」七六五名

新出紀久雄が東京渋谷で指導する十八名の水彩画家の展覧会。ヨーロッパの街並みなどを細密で透明な水彩で描いた作品が多く出品されました。なお、新出氏も「京風情」を特別出品、新出氏が元自衛官である関係から北海道内全域の多くの知友がオープニングに参加しました。



「選ばれし者たち」展

鹿追町民ホール

七月二十四日～八月十二日

「入場者数」一〇二八名

美術評論家・中野中が銀座で開催している四企画の合同展。四グループの三十二点の作品が一同に会しました。それぞれが所属する結社の作品傾向の違いを超えて、「互いの軌轢と拮抗と共和が北の大地でいかなる磁場を生むのか」（パンフレットより）という機会となりました。なお、北海道からは小笠原実好（苫小牧市）の「復活」を展示。

「北海道二紀作家展」

鹿追町民ホール

八月十四日～八月二十六日

「入場者数」八〇四名

北海道在住の二紀展出品者による展覧会。三十三名の画家が東京の本展をめざして意欲作を出品しました。最終日の八月二十六日には玉川信一・同展理事による作品講評会も行われ熱心に聴き入っていました。

二紀展は十勝では七名という多くの出品作家がいることから、関心の高さがうかがえる展覧会となりました。



神田日勝記念美術館友の会

創立二十周年記念式典



十二月八日
神田日勝記念美術館

神田日勝記念美術館友の会が創立二十周年を迎え、第十回日勝祭に併せ、記念式典を行いました。同会は、一九九二年に美術館建設運動を展開した有志が集まり、美術館事業の普及をめざして発足しました。「無墾祭」（開館記念祭）、「馬耕忌」（忌日に画業を顕彰するついで）、「日勝祭」（生誕祭）の他、特色ある展覧会事業も企画し、北海道でも

特筆すべき活動を展開しています。

式典では、武田会長の挨拶のあと、吉田町長が来賓を代表して祝辞を述べました。

また、十周年以降会の発展に尽力された脇坂裕（二代目会長）、山岸明（三代目会長）、木俣君子（副会長）、故鈴木和美（副会長）の諸氏の他、窪島誠一郎（「馬耕忌」の命名者）、野村英雄（「馬耕忌」の祭壇制作）の両氏に感謝状が贈呈され、脇坂氏が「これらの数多くの出会いは日勝さんの導きによるもの」と贈呈者を代表して謝辞を述べました。



神田日勝記念美術館友の会

研修

十月十三日～十四日

木田金次郎美術館（岩内）
札幌芸術の森美術館（札幌）
北海道立近代美術館（〃）

〔参加人数〕 十名

神田日勝記念美術館友の会創立二十周年記念事業の一環として先進的活動を展開する美術館を視察しました。

岩内では木田金次郎美術館の「児島善三郎と木田金次郎」展を学芸員の解説で観覧、館長を交えて館の設立経緯や目的、運営形態、町民からの期待や要望、美術館と地域との関係や、指定管理者としての運営のメリットやデメリットなどを伺いました。

札幌の札幌芸術の森美術館では「パラレルワールド、冒険譚」を観覧後、野外彫刻の解説ボランティアにボランティア活動のあり方についての実例を伺いました。同ボランティアは美術館と市民を結ぶ目的で発足、野外彫刻についての研鑽を重ねつつ、来館者に対応する誇りと喜びを持った活動が紹介されました。



札幌芸術の森美術館の解説ボランティアの方々と



札幌芸術の森美術館



木田金次郎美術館

芸術鑑賞

バスツアー

六月三日

北海道立近代美術館（札幌）

〔参加人数〕 三十二名

倉敷にある国内屈指の美術館である「大原美術館展」を鑑賞。同館の知名度の高さもあり、申込み者が殺到、関心の高さがうかがえました。展覧会は三部構成で、モネやルノワール、モディリアーニやロダンなど西洋の絵画彫刻、児島虎次郎を始め梅原龍三郎や岸田劉生、萬鉄五郎や棟方志功など近代日本の名画、現代美術としてロスコやラウシェンバーグ、草間彌生や福田美蘭など、大原美術館の多岐に渡るコレクションの充実した展示により、有名な作品の前には人垣ができていました。



第十八回

馬の絵作品展

十月二日～九日
鹿追町民ホール



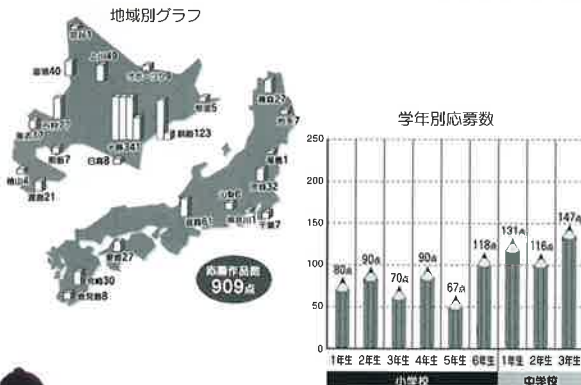
・文部科学大臣賞 旭川市立愛宕中学校2年 藤田 翼

神田日勝が、生涯に渡り馬を描き続けたことにちなんで小中学生を対象に開始された全国公募の作品展も十八回を数えました。九州の宮崎県や鹿児島県などから馬産地を中心に道外二〇七点、道内七〇二点で、応募総数は九〇九点にのぼりました。本年は中学三年生の出品が多く、全体的な傾向としては、馬の目の表情が豊かな作品が見受け

られた他、水彩絵の具も混色や明暗の付け方などに工夫が見られました。十月六日に開催された表彰式では、審査委員長の「年々、表現の幅が広がり、馬を描くために構想を練るなど準備が十分で、出品者の意気込みが感じられました」一講評があり、式終了後自分の作品の前で記念撮影などを行なう受賞者もいました。

第18回 馬の絵作品展入賞者

- | | | |
|--------------------|------------------|--------|
| 〔文部科学大臣賞〕 | 旭川市立愛宕中学校2年 | 藤田 翼 |
| 〔北海道知事賞〕 | 北海道教育大学附属釧路中学校2年 | 平田 佳奈美 |
| 〔北海道教育委員会教育長賞〕 | 千歳市立泉沢小学校6年 | 道又 蒼彩 |
| 〔鹿追町長賞〕 | 函館市立柏野小学校3年 | 昌原 未歩 |
| 〔鹿追町教育委員会教育長賞〕 | 北海道教育大学附属旭川中学校1年 | 石丸 桃歌 |
| 〔神田日勝記念美術館長賞〕 | 留萌市立港南中学校3年 | 安田 絵美 |
| 〔北海道新聞社賞〕 | 北海道教育大学附属釧路小学校6年 | 福士 千悠 |
| 〔十勝造形サークル委員賞〕 | 鹿追町立上幌内小学校1年 | 三上 洋平 |
| 〔帯広市教育研究会工芸美術部会長賞〕 | 帯広市立帯広第四中学校3年 | 長内 八重 |
| 〔J R 北海道社長賞〕 | 札幌市立資生館小学校4年 | 林 大陸 |
| 〔北海道電力(株)帯広支店賞〕 | 北海道教育大学附属釧路小学校2年 | 福士 彩乃 |
| 〔帯広信用金庫理事賞〕 | 札幌市立福井野中学校1年 | 西谷 三津谷 |
| 〔ホテル福原社長賞〕 | 栗東市立金壽小学校(滋賀県)5年 | 齋藤 篤人 |
| 〔審査員特別賞(学校賞)〕 | 北海道教育大学附属釧路中学校 | |



七月二十六日
ライディングパーク
「参加人数」十九名
齊藤隆博(審査委員長)、甲斐紗織・内藤智香の三先生の指導のもと、気温三十度を超える猛暑の中、参加者は午前中草を食べる馬を目の前でスケッチを行い、昼食後はウリマックホールで水彩やクレヨンで色塗りを仕上げました。

馬の絵 写生会



鹿追高校のポランティア同好会の生徒による馬の絵作品展の準備作業が、例年通り取り組まれました。馬の絵の画用紙につける紙額制作や、学校名や応募者名などを手書きする作業など、展示のための地道な作業は美術館には貴重な戦力となっています。

ポランティアの活動



新収蔵作品

紹介

神田日勝作品

購入

神田日勝の作品三点を購入、一点を受贈、二点を受託しました。また併せて、渡会純价氏の版画作品二十点、齋藤吾朗氏の油彩作品一点、中谷有逸氏の版画作品六点を作家より受贈しました。



【風景】年代不明



【湿原の農道】1966年



【静物】1968年

受贈



【風景】1969年

高野 薫氏より

受託



【駒ヶ原展望】1968年

帯広信用金庫より



【広尾海岸】1969年

渡会純价作品



【おうま】他計20点

齋藤吾朗作品



【長瀧の延年・花傘い祭り】2008年

中谷有逸作品



【碑・古事記（稲城の城塞）】2009年 他計6点

第一期常設展

「神田日勝と静物」

六月二十六日～十月三十一日
【入館人数】四一七五名

平成24年度

常設展

神田日勝の、「ゴミ箱」や「家」などの作品は、日常生活の中で身の回りのありふれたものや捨てられたものに目を向けています。また、「静物」では、野菜や果物などを繰り返し描き、剥きかけのリンゴやミカンなどを、細部まで緻密に表現しました。馬を描いた作品では、馬槽（ばそり）やバケツなど馬小屋にあるものを、「画室」の連作では、カラフルな色彩で絵の具のチューブや缶を数多く描きました。なお「画室」連作では作品によりその配置や構成に変化が見られます。



【静物】1966年



【画室C】1967年

静物を描いた作品には、日常生活の細部に視線を注ぎ、材質や存在感を際立たせようとした画家の意図が見とれます。

第二期常設展

「神田日勝が描いた人間像」

十二月十一日～平成二十五年四月三十一日
【入館人数】六六六名（三月三十一日現在）

初期の「自画像」から、「人間A」などの表現主義的な作品、「ハイと人」などの現代社会に生きる人間の疎外や苦悩などを表現した晩年の作品まで、人間像表現を紹介し、その造形上の特徴や人物表現の変遷をたどりました。

自分自身、肉体労働者、馬や牛とともに厚塗りの荒々しいタッチの人間群像や裸の男女、部屋の中や壁際のやせ細った男など、日勝の作品には、さまざまな人物の表現が見られます。日々の生活を懸命に生きる姿、願望や苦悩、怖れなど、内面的な心情にせまる人間像など、それは画家自身の生きることを意味する姿の現れともいえます。



【飯場の風景】1963年



【ハイと人】1969年

静物を描いた作品には、日常生活の細部に視線を注ぎ、材質や存在感を際立たせようとした画家の意図が見とれます。

第18回 藝壑祭

(開館記念祭)

六月十七日

神田日勝記念美術館
鹿追町民ホール

「参加人数」一三九名

六月十七日の開館記念日を祝うために企画され、故高橋揆一郎館長により「荒れ地を耕す」意で命名された開館記念祭



も、十八回目を迎えました。

展示室でのコンサートでは「そよ風コーラス」(鹿追町)の演奏により山田耕筈作品集から「あわて床屋」など八曲と「碧空」など外国曲三曲が披露され、来場者が懐かしい歌曲に聴き入りました。第二部の町民ホールでの交流会では、恒例のワインとチーズに加え、露の煮しめやじゃがいものホイイル包みなど友の会会員有志の手作り料理がふるまわれ、「そよ風コーラス」のアンコール演奏なども含んで、交流を深めました。



第20回 馬耕忌

8月26日 鹿追町民ホール

[参加人数]80名

神田日勝の忌日(八月二十五日)に近い日曜日に開催する「馬耕忌」も二十回目という節目を迎えました。館長鼎談では「個人名を冠した美術館の明日を語る」をテーマとして、画家三岸好太郎・節子夫妻の孫の三岸太郎、一宮市三岸節子記念美術館学芸員の堤祐



子の二氏がゲストとして登壇しました。

三岸氏は祖父母と父が画家で、幼い頃から家族の思いを身近に感じたことや、遺族の立場から美術館への提言や作品鑑定も行っていることなどを語り、堤氏は学芸員の立場から、個人名を冠した美術館として画家の画業を後生に伝えることと美術館と地域のつながりとのバランスの難しさを語りながら、美術館のめざす方向に向かって、遺族と協同して進みたいと述べました。その他、玉川信一二紀展の講演や田中光俊氏のギター演奏も行われました。



第10回 日勝祭 (生誕祭)

12月8日

鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館

[参加人数]59名



「事」と題した講演会が行われました。東日本大震災の被災地である宮城県石巻市で「無言館」展を開催した際の、戦没画学生の作品を鑑賞する人々が抱く共感が強く感じられたエピソードや、村上華岳に生きる力を得た女性の実話も紹介され、美術が人を動かす力を強調していました。



日勝祭は神田日勝記念美術館友の会創立二十周年記念式典と併せる形で開催され、長野県上田市で「信濃デッサン館」と戦没画学生の慰霊美術館「無言館」の館主、窪島誠一郎氏による「絵のちから、人のちから」美術館の仕事

感想ノートより ⑳

2年前に亡くなった祖父が農業をしながら、ずっと絵を描いていました。小さい頃は、家にひとつしかない石炭ストーブのある茶の間に家族全員が集まっていましたが、その片隅で油絵を描いていたので、空間に広がる油のにおいを思い出します。その祖父が持っていた神田日勝の画集を小学生の頃、良く見ていました。「馬〈絶筆・未完〉」も印象に残っていますが、一番覚えているのは「室内風景」でした。本物が見られなくて残念でしたが、他の絵をいろいろと見ることができ、とてもよかったです。ありがとうございました。

2012.3.29 旭川市 M.O

いっしょうけんめい、生きなくては、と思いました。

2013.9.16

馬の仕事をして55年。何回も見に来ています。長い長い歴史を感じます。

2012.11.4 S.N

ずっと来たかった場所に来ることができて、幸せな時間を過ごすことができました。心をぎゅっとつかまれっぱなしでした。人の心を動かすことの素晴らしさを改めて感じました。ありがとうございました。

2012.11.23 東京都 R.K.

他館での当館所蔵作品の展覧会紹介

中札内美術村 四月二十五日～十一月四日

「二十歳の輪郭」展



「はたちのりんかく」コンクール展に併せ北の大地美術館を会場に、関根正一や三岸節子、池田満寿夫らの二十歳の頃の作品とともに、神田日勝の「自画像」と「馬」の2点が展示されました。

帯広市民ギャラリー 十二月六日～十二月二十五日

「美術で見る帯広二三〇年の歴史」展

帯広市開拓一三〇年・市政施行八〇年を記念し、神田日勝の「入室E」を含め、油彩や日本画、書、彫刻、現代美術など一五一点の作品で構成された展覧会。岡沼秀雄、加地保良、神田一明、齊藤隆博、山本時市の当館所蔵作品が展示されました。

北海道立文学館

平成二十五年一月三十一日～三月二十四日

「高橋揆一郎の文学」展



北海道を代表する文学者であり、芥川賞受賞作家で、神田日勝記念館長でもあった高橋揆一郎を偲ぶ特別展「高橋揆一郎の文学」が開催され、代表作品や故郷歌志内の炭鉱関係の資料とともに、神田日勝記念館長として足跡も紹介、神田日勝の「馬（絶筆・未完）」や馬の絵作品展の文部科学大臣賞受賞作品三点が展示されました。

「夭折画家ノオト―二十世紀日本の若き画家たち」 窪島誠一郎著



信濃デッサン館主である著者が、村山槐多、関根正二、松本竣介、豊光ら十二人の芸術家をめぐる旅と称して、画家に対する思いを語っています。かつて著者の「北国願望」に収載された神田日勝についての論考も改訂されて収録されています。

『画家たちの原風景―「日曜美術館」が問いかけたもの』 堀尾真紀子氏著



堀尾氏はNHK教育テレビ（現Eテレ）の「日曜美術館」の元司会者。著者が番組を通して出会った画家たちの人生と芸術に対する思いを語ったもので一九八六年に同タイトルで刊行され、日本エッセイストクラブ賞を受賞しました。本書は前著に大幅な改訂を施して刊行されたものです。

福原記念美術館と共通入館券発行

鹿追町内にある当館と福原記念美術館が十月一日から共通入館券を発売しました。共通券は福原記念美術館の開館以来の懸案でしたが、両館の振興と知名度の向上ということで協議が重ねられ、取り組みが決定しました。入館料は一般六〇〇円等で、二つの美術館に入館できます。

神田日勝 関連書籍紹介



美術館の学校活用

鹿追町内では、学校教育関係には鹿追小学校2年の社会科、3年の鑑賞授業を生かした壁新聞作り、鹿追中学校2年の美術の鑑賞授業が行われ、また《ふれあい2012in 鹿追》というイベントでは幼児から小中生、高校生や教諭や父母などが来館し、ハロウィンの仮装衣装を美術館ロビーで製作するなど、例年ない試みもありました。

また、北海道高等学校文化連盟の美術専門部の夏期実技研修会や、全道高等学校図書研究大会等で、視察や研修が実施されました。



アート・キッズ・クラブ

5月23日～平成25年2月23日
鹿追町民ホール
[参加人数]小学生49名

児童対象事業のひとつであるアート・キッズ・クラブは5月から2月まで年8回、実施されました。これを支援するキッズ・ボランティアとして、鹿追高校ボランティア同好会の生徒9名と、町内在住者5名が登録し、子どもたちの工作に対する製作の補助、準備や後片付けにあたりました。

リサイクル工作が中心ですが、紙粘土によるイミテーションスイーツやダンボールによるミニチュアハウスなど、創意工夫をしながら取り組みました。

子ども芸術鑑賞ツアー



8月3日 十勝千年の森
[参加人数]28名

十勝千年の森(清水町)で開催された北海道ガーデンショーを見学。4班に分かれて、デザインされたガーデンや野の花、昆虫などを見て周り、午後は板や小枝、どんぐりなどで工作に取り組むなど終日広々とした森の雰囲気を楽しみました。



子どもワークショップ

アルミの針金で工作にチャレンジ!!

8月3日 鹿追町民ホール
[講師]美術館職員
[参加人数]25名



ブルーやシルバーなどカラーアルミの針金で、カードスタンドとハンガーを製作。スティック糊を利用して針金をコイル状に巻いて、カードを挟めるような形に指で曲げて3個ほど、また、うさぎやくまの顔の形に曲げてフック付きの可愛いハンガーを作りました。子どもたちは、星やト音記号などデザインに工夫をこらしていました。

かわいい小皿を作ろう!

平成25年1月9日
陶芸工作館
[講師]陶芸工作館職員
[参加人数]29名



鹿追焼き用の粘土で、マグカップの形の平らな小皿を製作。型紙を平らに伸ばした粘土の上に置き、周囲を道具で切り取り、皿状に少し周りを持ち上げて、平らな部分に自分や家族のイニシャルなどの文字や、ハートや動物などのイラストを刻んだりしました。三上正陶芸職員の指導のもと、1人が3個製作しました。

ダンボールでおもしろ時計を作ろう!

平成25年3月28日
鹿追町民ホール
[講師]中島 亜希子氏
[参加人数]21名



ダンボールを切って、フェルトや色画用紙などで文字盤の文字や飾りを施し、ユニークなデザインの時計を製作。時計パーツを取り付けるので、実際に時計としても利用できるすぐれもの。子どもたちは、文字盤のデザインを、いちごやカエル、猫や恐竜などさまざまにデザインを工夫し、自分だけのオリジナル時計を手に入れました。

親子ワークショップ



11月23日 鹿追町民ホール
[講師]玉山 知子氏
[参加人数]39名

親子で美術館に親しむためのファミリー美術館事業の親子ワークショップ。羊毛作家の玉山知子氏を講師に迎え、「水フェルト」の技法で、クリスマスツリーとサンタの飾りを製作。幼児と小学生とその親が参加し、三角帽子状の飾りに羊毛やフェルトの目やハートなどの形に切るなどして、楽しく製作しました。

神田日勝と新具象の画家たち

※ 訂正のお知らせ。

神田 日勝 西村 新一 神田 一明 北岡 文雄 木下 勘二
 小林 政彦 稲村 英治 豊島 博彦 浜田 知明 伏木田光夫
 與志崎 朗 米山 将治 渡邊 謙祥

「新具象の時代」

米山将治

第二次大戦後は、芸術の方法もかたちも激しく変容してきます。戦後芸術に強く刺激を与えたのは、サルトルとカミュの実存主義的思想でした。社会的現実と人間存在のさまじさにある「不条理」を表現行為の根柢におくとき、芸術のスタイルもおのずから異質なものになっていきます。

実存主義美術、といった呼称はみかけないが、フランス「新具象」・日本「新具象」から「壁派」・「アンフォルメル」(非定形絵画)までの戦後美術の流れには、現実世界と自己の体験との関係がとりわけ深々と反映しているようです。アンフォルメルの爆発的なパワフルな表現は、不条理の哲学から行動の思想への大転換と言ってよいでしょう。



神田日勝「馬」1965年



與志崎朗「花嫁の橋」1962年



神田日勝「飯場の風景」1963年

ひとまず広角レンズで全景を捉えてみたものの、付註が要ります。「実存主義美術」という呼称は、後年に矢内原伊作が、ジャコメッティ論の際に用いた原語から、戦後美術は、実存主義とシュール・リアリズムのふたつを軸として、手ざかりを重ね進められていったように、と、画家たちのアトリエでは、終戦から一〇年を経てもまだ題材は欠乏していません。次のような回想があります。

「油絵具を自作しよう」と顔料を亜麻仁油で練り上げた時、キャンパスは背広の芯地、二カ方と鉛筆を透すたりした。(中略) 世界の美術発信の中心地は、フランス響を与えることになる。」

●宗左近「私説 戦後美術史」(所収、P八十二)

「二十六年に(フランスの新具象派) オム・テモワンの新風を集めた「サロン・ド・メ」展。マチス展、ピカソ展、二十七年に、ブランク展。日本国際美術展。」

●オム・テモワン(目撃者)「現代の証人と和訳」

●石井公彦(編)「主体美術の歴史と系譜」(主体美術の三〇年「所収」) ●一九五〇年「読売新聞社の「現代世界美術展」(昭和二十五年) 毎日新聞社「フランス美術展 サロン・ド・メ」一九五一年二月(昭和二十六年)、が日本橋高島屋で開かれ、戦後の若い美術家に大きな衝撃を与えた。(中略) 戦後フランスの前衛絵画の動向が展示された。一九四八年からのオム・テモワン(現代の証人) ロルジュ、ミノール、ビュッフェ、モッテ、ロペイロルらは、日本では「新具象」という紹介でかなりの影響を与えている。」

●吉田蒙介「北海道の美術史」(所収、P一〇〇)

「この展覧会が注目された理由は、何と云っても戦争で閉鎖されていた海外の同時代の美術が、いきいきと紹介されたことだろう。サロン・ド・メは、対独文化運動のひとつとして結成されたもので、フランス画壇の進歩と中堅を中心に大家や外国人作家を含めた紹介展だが、その一九四九年展という最新の制作活動、作品傾向が、一部ではあるが確認できるという点に、こぞぞと歓迎する理由があった。」

造形性の強い具象と、新しい抽象表現を併せたこの展の傾向を、新表現主義(ネオ・エキスプレシオニズム)と称したい。ドリアル(当時、フランス国立美術館副館長)は述べている(所収、P八八)

からアメリカ、ニューヨークに移り、ありとあらゆる表現方法が試みられる。日本美術協会に、新作協会ははじめとした、新具象派が現れ、新具象派から無定形のアンフォルメル派まで続々と現れるのである。」(※菅原弘「新具象美術協会五〇年史」二〇〇〇年)

「日本の戦後美術は、「新具象」から始まる(※米山将治) 言い切った、少しためらうのは、当時から六〇年余も過ぎた現在、「新具象」や「新具象派」の呼称がどの程度に「術語」として定位置されているかという点に、気がなつたからです。以下は用例検証のために引用しました。

「祖国への郷愁と動乱への通苦を素朴に書きとめていた朝鮮人作家・曹良奎(チヨリョング)が、連戦を發表しはじめたのは、五六年(昭和三十一年)ごろである。そこには「密室」の絵画も「事ではなく物を描く」課題も、さらにはルポルタージュ絵画の実験も、もっと深いところまで受けとめられている。「人足と倉庫」(一九五七)の半開きの鉄の扉の前には、土くれのような人足が転がっている。」(中略)「わたしは、安部真知、池田龍雄、小山田チカ工、曹良奎、中野淳、福田恒太らによびかけて「新具象」グループを作った。」

●中村聖司「日本のリアリズム」展図録(北海道立近代美術館発行) 所収(P八六、解説)

「このような一九五〇年代の画家たちの多くは、戦前のリアリズム表現が現実批判を見失ったこと反省に立って社会的現実を鋭く見すえて描きたりした夜的女を描いてみせた、エロスの前衛、古沢岩美も忘れ難い。」

うとした。そのため彼らは新しい、リアリズムを求め続けたのである。(中略)「一九五〇年代なかばころから、こうした傾向を積極的に押し進めつつその展開を積極的におしした批評家や画家の間で、新しい絵画動向を示す呼称として「新具象」ということが使われるようになった。」

以上は新具象をめぐる考察に必須の資料かと思えます。それらの他に「日本美術論争史」(中村義一著)、「池田龍雄・中村宏」展図録(練馬区立美術館発行)、「芸術とは無常なもの」評伝・鶴岡政男(三田英彬著)、「北岡文雄」(佐藤友哉著)、「ミュージアム新書・北海道新聞社発行」を併せて今回企画のための貴重な教示をいただきました。

北海道における新具象の画家たちを通過することで、神田日勝の画業への新たな視界を開きたい。その今回企画の途上で知り得たのは、日本「新具象」の流域に立ち立する多くの画家群像でした。

戦中期(一九四三年)に結成された「新人画会」松本竣介、豊光・井上長三郎、鶴岡政男、大野五郎ら八名の細流が、戦後は自由美術家協会と合同し、前衛美術会や日本美術会と交錯し、ふたつの「日本アンデパンタン」と水脈を通じつつ、一九五〇年代の美術運動の主流となるが、如実に看取されました。

作品で見ると、まず最初に挙げられるのは浜田知明の「初年兵隊歌」シリーズ(銅版画)でしょう。浜田は自分の兵隊体験を、重い存在感と切りつめた造形性で刻印しました。

また、北岡文雄は中国大陸から妻子連れの引揚げ難民となり、朝鮮国境沿いの丹東に滞留のとき、東京美術学校で同期生の田風(当時、八路軍の幹部になっていた)と再会。彼から中国木刻の技法と題材を知らされ感銘しました。帰国の際、一九四七年「祖国への旅」連作(木版画)の力強い刀跡と記録性は、新具象の時代へのさきがけでしょう。

「新人画会」の松本竣介(一九四八年没)と豊光(豊川光郎)は共に早逝しています。鶴岡政男は東京上空襲で全作品を失いながらも生き延び、生活難のなかで、戦後絵画の代表作と目される「重い手」(一九四九年)を描きました。現実の重圧に閉ざされ苦悩する存在を、シュールに形象化しています。

一九五〇年代、ルポルタージュ絵画運動から出発した池田龍雄は、尖鋭な社会批判を行動で裏打ちして、一九五三年には「アメリカ兵・子供、バラック」や「網元」などをペン画で描き、

また、第一回展には、一歳の河原湯の「浴室」シリーズが初出されますが、その後一九五四年の読売アンデパンタン展に、二〇点ほどの連作が発表されます。それら「動」画で展開するイメージ群を、中原佑介は「密室の絵画」と評しました。これら「新具象」の時代を広義に包み込みましたが、また言及を要する画家は多い。

主要なものでは、中谷泰「農民の顔」(一九五四年)。あるいは田中阿喜良(行動美術展)の諸作。浜田から書へと続く人物頭部の描き方の(丸刈り頭のよな)印象は、田中にも共通して、俗にいう「新具象派」スタイルの灰褐色の画面が、日本中に拡がりました。

一方、シベリア抑留の体験を、独自の空間意識と木炭を練った黒で描き、むしろ「壁派」の力りスマとなった香月泰男も影響が大きい。更には、戦後の焼け跡の破れテントの下に、凜とし



資料展示風景

東京発の美術史が述べる「新具象」は、田中阿喜良のバリ移住と曹良奎の北朝鮮帰国で閉幕となるでしょうが、地方からの視界では、それは違っています。その後一〇年こそ、日本「新具象」が熟成と転位を重ねていく、神田日勝の制作期なのです。

一九七〇年に海老原喜之助が再び訪れたパリで客死し、神田日勝が「室内風景」と「馬(未完成)」を遺して他界する、その時点で本誌の「新具象」の時代の終焉なのでしょう。

今回展に出展いただいた、北海道の画家たちは、この時代に「新具象」を通過点として、それぞれに有為な形を遂げた人々です。改めて「新具象の時代」の大系とその形成を、詳かに見分けていただけるよう希っております。

(元) 神田日勝記念美術館館長
 ※展覧会力タログより転載